
洸

枝豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

洸

【著者名】

枝豆

【Zマーク】

Z9286A

【あらすじ】

俺は、この思いを胸のどこかで消し去りたいと思っていたんだ。

小さな小さなあの光を掴もうとして
俺は、一生懸命伸びしたんだ。

「山瀬先生、いらっしゃいますか？」
私は、今日も先生の所へ行く。
もちろん、本当に勉強のことだけではない。
勉強のことだけなら、私はこんなところまで足を運ばない。

私は、数学の山瀬尚先生が好き。
例え、それが叶わない恋だと分かっていても。
この気持ちは、偽ることができなかつた。

「山瀬先生、いらっしゃいますか？」
小さな小さな女の子が俺を呼んでいる。
光り輝く1等星の周りで微かに光る10等星。
彼女は、まるでそんな感じ。
けして、数学は悪くない。
でも、彼女はここに来る。
もっと来て欲しい生徒はたくさんいるのに。

俺は、愚痴を小声で吐きながら彼女の元に駆け寄った。

山瀬先生が、駆け寄つてくる。

待つている間も、私は先生を目で追つていた。

呼ばれてから来るまで、先生は微妙に口を動かして何か言つていた。
誰にも聞こえないように。

もしかして、私のこと？

毎日来るのがそんなに迷惑に感じているんだろうか。

軽い自己嫌悪に陥っていた私は、先生が広い職員室からやつてくるのを、ただぼーっと見ていた。

先生が、息を切らしながら言つ。

「ごめん神木、待たせたな。」

たつた30メートルも無い所を走つただけで息が切れる。

中・高・大学と、バスケットで鍛えたはずの体力はどこへやら。
やつぱり、一年間机に向かつてばつかりじや駄目だな、と感じつつ
俺は、彼女に声をかけた。

「ごめん神木、待らせたな。」

目の前にいる、小さな彼女に目をやる。

いつもの大人びた雰囲気が、一瞬ちがつたものになつた。
小さな光が消えてしまったようだ。

「ありがとうございます。やつと、意味が分かりました。」

私は、先生に礼を言った。

本当は、最初から分かっていた。

先生とできるだけ一緒にいたいから。

先生の姿を見てみたいから。

それが、先生に負担をかけているかも知れない。

職員室の隅にいた、先生の表情を思い出す。

「ここに来る回数を、減らしたほうがいいかもしない。

ふと、そんなことを思つ。

涙で視界が滲む。

私は、そんなにも邪魔な存在なんだろうか。
できるだけ早く、先生と距離をおきたくて私は、こぎやかな声のする玄関へと走り出していた。

驚いた。本当に、驚いた。

彼女が、一瞬の間に目に涙をため、声をかけようとした瞬間に走り出していた。

たくさんの光が差し込む、玄関へと。

俺は、彼女が大きな光に吸い込まれ、いなくなってしまうかと思つ

た。

小さな小さな光が。

俺も、彼女を追いかけていた。

彼女が、大きな光に取り込まれる瞬間俺は一生懸命手を伸ばした。

大切な人を、俺の傍においていたかつた。一緒にいたかつた。

なぜかこの時、彼女の目に涙が浮かんだとき俺の中で何かが壊れた。

「先生・・・？」

帰ろうと、玄関から外に出ようと瞬間ものすごい力で腕を掴まれた。
今一番会いたくない人。

私の目から、涙が零れ落ちる。

彼は、そんな事どうでもいいようでもいいようで私を、人気の無い視聴覚室へと連れて行つた。

入った途端、先生の胸の中に抱きしめられた。

そして、信じられない言葉を聞いた。

「好きだ。」

俺は、今の今まで気がつかなかつた。

ほぼ毎日、俺に会いに来てくれる彼女の顔を見るたび他の生徒とは違う感情が芽生え始めていた。

その感情を、「恋」と認めることができなかつた。

認めたくなかった。

俺達は、生徒と教師。

俺の中での「理性」がその感情を消しかけていた。
でも、その理性も彼女の涙の前では無いと同然だつた。
俺は、ほとんど考えずこの気持ちを伝えていた。

なんで・・・。

今までそんな素振りを見せもしなかつたのに・・・。
また私をからかっているの？

「ゴメンな。お前が俺のこと『先生』と呼ぶ度にこの気持ちを必死に消そうって思つてたんだけ ど・・・やっぱり無理だつた。」「
先生の頬は高揚して真っ赤だ。

大人びていた先生も好きだけど、こんな先生も可愛いな。

私は、思わずクスッと笑つてしまつた。

「お前、何笑つているんだよ！」

そういう先生の顔がますます赤くなつていく。

「先生、可愛い。」

私は、微笑みながら先生の顔を両手で包み正面から見た。

「先生、可愛い。」

そう言つた時の彼女の動作のほうが可愛くて、思わずその十センチ程前にある彼女の唇を奪いたくなつてくる。

そこでようやく俺は、ある重大なことを聞いてないことに気付いた。

俺の頬にある彼女の両手をそつと下ろし、彼女に問い合わせてみる。

「お前、俺のことどう思つてているの？」

言つてから俺は思った。

俺は、なんと言う大馬鹿者なんだろうか。

彼女の気持ちも知らずに、俺だけの気持ちで突っ走って……。
なんてかつこ悪い。

俺は、目の前にいる彼女に目をやつた。

「お前、俺のことどう思つてこるの？」
聞かれてしまった。

やつぱりちゃんと言った方が良いよね……。
私は、目の前にいる彼の目をしつかりと見た。
「私も……。」

俺の目をしつかりと見ていく彼女の口からは微かな言葉うらしきもの

を発している。

でも、何とか聞き取るうつと彼女の口に耳を寄せた。

俺の動作で、彼女は緊張してしまったのか大きく息を吸つてよひよひやく俺の問いかけに答えてくれた。

「好き・・・」

顔を真っ赤にして、その一文字の言葉を俺に向けて言つてくれた彼女がとても愛しく思つた。

俺は、彼女を力強く抱きしめた。

俺は、遠くに居た小さな小さな光を手に入れたかった。

でも、俺は自分から君を遠ざけていた。

一生懸命伸ばしても君に届かなかつたこの手が、素直になることで君によひよひやく手が届いた。

俺は、一度と手放さないよひよひじつかりとでも君が傷つかないようにな、抱きしめたんだ。

俺は、君の隣の11等星になつたんだ。

(後書き)

視点が、口口口と変わりかなり読みにくかったと思います。
一度、書いてみたかった先生と生徒。
感想・評価お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9286a/>

洸

2010年11月16日02時58分発行